

2025年度 学校関係者評価委員会 報告書

学校法人伊藤学園
秋田社会福祉専門学校
学校関係者評価委員会

「専修学校における学校評価ガイドライン」に基づき、学校関係者評価委員会において「2025年度自己評価報告書」に対し、評価を行った。学校側からの説明および各委員からの意見を以下の報告書として取りまとめた。

【学校関係者評価委員】

《外部委員》

- ・ 渡部 幸雄 氏 秋田県介護福祉士会 会長
- ・ 須田 剛 氏 社会福祉法人秋田県厚生協会 特別養護老人ホーム
 高清水寿光園 施設長

《学校側》

- ・ 佐藤 庸子 秋田社会福祉専門学校 校長
- ・ 佐藤 寿太郎 秋田社会福祉専門学校 副校長

【学校関係者評価委員会】

日時：2026年6月4日（木） 14：00～15：00

場所：オンライン会議システム（Zoom等）

学校からの配布資料

- （１）2025年度事業報告書
- （２）2025年度自己評価報告書

I. 教育活動・学校運営の概要報告

学校側（佐藤校長）より、提出資料に基づき2025年度の教育活動概要について説明がなされた。

① 設置学科・定員および在籍状況

- ・ **教育体制の現状：** 東京福祉大学との併修（連携）による4年制課程を実施。専門学校生でありながら大学生でもあるメリットを活かし、国家試験対策やきめ細かな教科指導を行っている。
- ・ **学科・在籍数：** 定員80名（社会福祉学科40名、心理学科40名）に対し、在籍学生数は43名（社会福祉学科27名、心理学科16名）と、充足率は約2分1の状況。応募者推移は例年半々の割合である。

② 主な活動・行事実績

- ・ **校外研修・ボランティア：** 5月の見学研修（男鹿の水族館など）、6月の球技大会、避難訓練（春秋）を実施。
- ・ **地域貢献ボランティア：** 「キッズサッカー交流会」への参加や、7月の「子育て応援団」へのスタッフボランティアなど、学生が地域での細かな経験・お手伝いを例年通り実施した。
- ・ **学園祭・卒業式：** 11月に全員協力のもとメインイベントである学園祭を開催し、3月に卒業式を迎えた。

③ 就職・資格取得支援実績

- ・ **就職実績：** 社会福祉学科は8名全員が就職決定。心理学科は1名が病気のため未就職となったが、概ね高い実績を維持。
- ・ **資格取得目標：** 国家資格（社会福祉士・精神保健福祉士）の取得を主目的として入学する学生が多く、3年次までに主要単位や実習を終わらせ、4年次は徹底した受験対策に時間を充てる指導体制をとっている。
- ・ **就職の現場実態：** 卒業生の多くは福祉関係施設等へ就職。在学中に実務者研修を修了させておき、就職後に3年の実務経験を経て介護福祉士を取得するルートも目標に組み込んでいる。

Ⅱ. 学校評価（自己評価）結果に対する報告と審議

今年度より評価基準が「3段階評価」へ変更（3：基準を上回る、2：基準を満たす、1：課題あり）となったことに伴い、各項目の自己評価背景が説明された。

① 教育理念・目標および個別指導の徹底（項目1・2）

- ・ 学校側報告：明確な目的意識を持って入学する学生が多いため、学則やシラバスを逸脱するような学生（過度な欠席やトラブル等）はいない。集団教育ではなく、進捗が異なる学生に寄り添った「個別指導」を徹底している。

② 教育環境と個人ブースの活用（項目3・5）

- ・ 学校側報告：現在、北校舎の7階ホールを全面使用し、学生一人ひとりに個人ブースと専用PCを割り当てるスタイルを定着させている。これにより、周りにペースを乱されることなく自学自習ができる環境を整備している。
- ・ 安全管理：学園全体での避難訓練、5月の健康診断を実施。電気・施設・火災管理は外部の専門業者（保安協会、総合ビル管理など）に委託し、消防署への報告体制も万全である。

③ 保健・相談体制の自己評価（課題項目：評価1の背景）

- ・ 学校側報告：評価票の中で「学生生活に関する支援」「心身の健康管理体制」において教員から『評価1』がついた項目がある。これは、専門の相談員が常駐していないこと、また保健室がグループ3校（日本語学院、情報ビジネス専門学校、社会福祉専門学校）での共同使用となっており、専用の独立した体制ではないという現状を客観的に評価したものである。

④ 教員組織の現状（項目4）

- ・ 学校側報告：直近の教員数が4名と少数であるため、評価意見が集約されやすく「評価2（100%）」の項目が多くなる傾向にある。教員が定年まで長く勤務するベテラン体制であり、文章（職務分掌）に基づいた確実な業務分担がなされている。

⑤ 財務基盤と学校運営（項目6）

- ・ 学校側報告：平成14年より監査法人（公認会計士5名体制）による年3回の監査を受けており、5月の最終決算まで適正に処理されている。また、秋田県からの3年に1度の現場監査も含め、基準に則った健全な学校運営を維持している。

Ⅲ. 外部委員からの評価・意見交換

【委員からの評価・エビデンスについて】

- ・ **渡部 委員**：評価全体が「概ね基準を満たす」となっており、現場の先生方からのネガティブな乖離も見られない。介護施設の現場でも行政による実地指導があるが、今回の報告書は根拠（エビデンス）資料がしっかりと整理整頓されており、非常に細かくよく評価されている印象を受ける。

【評価基準と自己評価の姿勢について】

- ・ **須田 委員**：4段階から3段階への変更による見方の変化に納得した。個別指導や個人ブースの提供、ホームページ等から見受ける学生の生き生きとした表情を勘案すると、教員の皆さんは少し謙虚すぎる（自己評価を低めに抑えている）のではないか。もっと自信を持って、一部の項目を高い評価に位置付けても良いと感じる。
- ・ **学校側返答**：3段階の括りにおける教員の意識について、もう少し自信を持つようフィードバックを行いたい。

【現代の学生の気質とコミュニケーションの重要性】

- ・ **学校側（校長）**：心理学科等を選ぶ近年の学生は、中学・高校時代に友人から不登校やいじめの相談を受けた経験を持つ子が多い。一方で、コロナ禍の影響により対面での生きたコミュニケーション機会が圧倒的に少なかった世代でもある。言葉の表面だけでなく、相手の表情や空気感を観察する力を養うため、より対面指導を重視している。
- ・ **須田 委員**：現在の新卒職員を見ても、趣味が「推し活」や「アニメ」など自己完結型の傾向が強く、コロナの影響を実感する。そのため施設側としても、昔のような「先輩の背中を見て覚えろ」ではなく、年齢の近い先輩が公私ともにサポートする「プリセプター・メンター制度」を取り入れ、職場定着の工夫を行っている。学校側がそうした時代背景を捉え、コミュニケーション能力を育てようとしている姿勢は素晴らしい。

IV. 地域の福祉・介護業界の課題と今後の展望

① 2040年問題を控えた秋田の人材不足

- **須田 委員：** 秋田市の高齢者人口は2040年をピークにその後減少へと転じる推計だが、現在は深刻な「人材不足」である。ハローワークに求人を出しても中途採用の応募は来ず、既存のパイを施設間で奪い合っているだけの根本的解決にならない現状がある。そのため、外国人労働者の受け入れや、高卒・無資格者を雇用した上で施設側が資格取得（介護福祉士ルート）を後方支援するアプローチが主流となっている。
- **渡部 委員：** かつての福祉専門学校（2年制課程）時代は実習カリキュラムが非常に厳格（1ヶ月の泊まり込みや夜間実習など）で、目的意識の極めて高い学生が多かった。外部（実習生）が入ってくることは、受け入れ施設側のケアの質やレベルの向上にも繋がり、現場としても非常に育てられた実感がある。
- **学校側返答：** 過去、国の方針（40人定員等の厳格な制限）により、せっかくの志願者を不合格にせざるを得なかった募集最盛期の悔しさもある。現在は連携校の変更等により実務者研修ルートの直接受け入れは行っていないが、2040年までの高い地域ニーズに応えるため、魅力ある人材の輩出に向けて、需要と供給のバランスに少しでも貢献できるよう今後も募集・教育活動に邁進していきたい。

5. 総括

佐藤校長より、委員の両名に対して貴重な提言への謝辞が述べられ、次年度に向けた更なる学生獲得と魅力ある学校作りに努める決意を示した。

以 上